第２回区民版子ども子育て会議議事録
～コドモ・子育て世代の防災アクション～

2016 年 5 月 24 日(金)　１８：３０－
協力：せたがや防災ＮＰＯアクション
会場：成城ホール４Ｆ　Ａ＆Ｂ会議室
１８：３０－１８：４０
参加者自己紹介　参加者４６名

●せたがや防災ＮＰＯアクション　宮崎氏より

９３年北海道の地震：奥尻島で津波の被害がでた。それ以降国内の支援活動を学生つれて行ってきた。
春の支援活動も含めての話

ＮＰＯアクションとは？　→　本日はメンバーも多数参加
町会、自治会が中心になるが地域のＮＰＯも専門性をもっているので力になる。それをネットワークしている。ゆるやかなネットワークを組んでいることが地域の支援につながっていくので、本日参加の皆さまもご参加ください。
こういう場にいる人こそ助かる努力をして、地域の支援者になってほしい

首都直下地震が起きたら何が心配？
→人それぞれ・・・
学生にとっては内定の取消
粉ミルクの水を心配する学生はない、自分にとって何が心配なのかを優先順位をつけて、縦に並べておくこと。そうでないと防災の取り組みは難しい。
「まさか自分が」にならないように

具体的にイメージした課題は時間軸にしておく
どこの時間軸で困るのか
２つの軸をおいて考えると設計図ができる

激しい揺れがあったときの問題
時間帯、季節、天気、避難行動（避難所？自宅？）
数日経ってからの課題、１週間先、１年先、半年先には何が必要となるか？
首都直下地震がどこでおこるかわからない・・震源因は１８ある（ここで起きたら大変と想定した場所）世田谷直下があってもおかしくない

震度６強の揺れに耐えられるか？

南海トラフ（プレート型）と直下型地震の揺れの範囲は違う
直下型の範囲は点、プレート型は面

震源がちょっとずれていたら支援者側にまわれるイメージあるか

何に備えるかどうやって生き残れるか
どうやって支えられるか

激しい足元からの揺れ＝自助　家具の揺れを想定しておく
１）　建物の耐震化
２）　家具の転倒防止
３）　搬出、固定

自らの命と家族の命を守る

＜熊本地震災害＞
前震、本震があった珍しい例
丈夫な瓦→地震には弱い　風水には強い造り
直下型　家の構造は大丈夫でも瓦がずれる、擁壁が崩れる
雨が降ると雨漏りから家の中がダメになる　→屋根の補修がニーズにあった

災害が起きると建築士の判断で赤、黄色になる
緑色の家でのみボランティア活動ができる　団体の判断

家財、大切なもの（お金、貴金属、写真、書類）は丁寧に探せば必ず見つかる

倒壊した建物　→がれきの分別をしておかないと処理費用が莫大になる
■スタートダッシュのキーポイント
→地域の人に浸透する前に始まってしまうと後手後手になる

＜避難所支援（熊本市東地区）＞
掃除をまずする（皆で協力して行う）→土足厳禁、通路を作る（居住スペースとわける）
エコノミー症候群を防ぐ→体操をした
夜になると校庭に車がたくさん来る→昼のうちに線をひいておくときれいに駐車するようになる

炊き出しは子どもたちにも手伝ってもらう→親も手伝ってくれるようになる

熊本の場合、避難所の開設は学校の先生が担当→学校が再開となったとき（長期化）に地域の自主運営となっていくが、自主運営することを知らないことがある。５日間かけて、それぞれまわって理解をしてもらい、学校の先生と地域の人とで会議をする
反発が出たところは自主運営ができないことにもなる

避難所でも

非日常での遊び心を地域の人とする
→子どもたちにイラストを描いてもらう
→子どもたちに献立予定を書いてもらう
実際にはフラットな関係の中での提案や実施が大事

避難所での乳幼児を含めた環境改善はポピュラーになってきた
授乳室が更衣室にもなる　→　避難所の中に区画をつくる

一番いい場所に物資が置いてあるのはどうなのか？人の宿泊場所より物資がいいところにある。現場レベルでは漏れがあった。
ご自由に、といいつつ「一人１個」にしておくのはどうなのか？
クラッカーは残ってしまう
たくさん届く物資をどうするか？ただ配布すればいいのか？

個人情報の問題で避難している人の名簿が作れない
アレルギーの有無、障害の有無、細かいことを聞かなければならない

地域に人がいないと物取りが来るのでは？
地域の若い人が寝泊まりするときもある
→噂が噂を呼ぶ時がある、抑止力として警告、巡回も必要な支援かも

避難所に情報が集中する→地域の人にどう伝えるのか
避難している人には掲示板に貼るだけでは伝わらない時もある
必要な人に必要な情報を適切に伝えられるかも重要な支援活動

大人は【食う」【寝る】【出す】子どもは【遊ぶ】が加わる
子どもたちのあそび場、走れる場所が必要になる
一時預かりの機能を作った
→子どもが一緒だと家の片付けができない人への支援
学校の運営が先生をしていたのですぐに教室の使い方が自由に使えた

ペットの問題も

理解を示さない人には説明する

顔の見える関係がわずらわしい
町会、自治会などのコミュニティが嫌な場合が都市生活にはある

乳幼児連れ：散歩や買い物の範囲の中ですれ違う人と「にこっ」としておくだけでもいい→気にかけてくれる人が増える

話しかける、コミュニケーションをとる　→防災のための取り組みとして肩の力をいれなくてもできる

今のトレンドは避難しないで過ごせる街づくり

事業所、学校での備蓄

避難しないための
＝日ごろの備え　←個人、事業所の備蓄など
＝街づくり←耐火、耐震化など

高層マンションを想定したものはない

自宅で避難している人にどう情報発信できるのか
誰がどのように、どうやって伝えるのか
→情報発信

１９：２０－
後から参加した人の紹介

４１名参加　（＋子ども２名）

●グループワーク

１回目　子ども・子育て世代での防災の課題出し（１５分）
＜＜発災前と避難生活の２つにわけての課題だし＞＞

２回目　一人残してシャッフルしての課題出し（１５分）
＜＜もう少し個別の課題も出すように（小数派：アレルギー、障害のある子供のいる家庭に対しても）＞＞

＜休憩＞

３回目　一人残してシャッフルして、所属のない乳幼児（名簿のない時期）に特化した課題出し

ここにいる、といえない人もいる、こういう時はどうしているのかな？
わからない部分も出しておく　素朴な疑問や不安も出しきる

４回目　支援者として今からできるアクション　既にある資源の活用

●グループごとの発表（１グループ１分）

１）　備えるアクション　すぐやる、知った人は伝える

２）　防災に興味を持ってもらう手遊び歌を披露（大きな栗の木の下で）お母さんたちが親しみやすいキーワードをＰＲ

３）　・７月からネウボラ→妊娠期からの母子情報を把握しておく
・地域のおでかけひろばなどの拠点を活用、スタッフが避難所でひろば開設、避難所で集めた情報をひろばスタッフが伝える
・医療機関の活用　日ごろから医療機関との連携をする

４）　・小さい子を見たらおせっかいおばちゃんになって声をかけて繋がりを
・妊婦の時の備え、何かのきっかけで周知
・存在を知っている場所が大事：拠点
・おんぶひもの活用（災害時には抱っこよりおんぶ）

５）　・つながりがない人たちは避難所もわからない→児童館、ひろばで常時解決をつくっていく　→ひろばを増やす？　健診などで児童課やひろばにつなげる
・小児科に情報がある、とすれば取りに行けるのでは
・エリアごとに資源や情報があれば
・避難所ではグルーピング（同じ幼稚園、保育園での関係性の中でのうまい声掛け）赤ちゃんのいる家庭を一カ所に集める、お互いに預合いもする

６）　・災害時の私たちのアクション
・町会に加入する→子育てグッズのサンプル配布、お祭りなどの仕組みづくり　高齢化する町会からの発信は難しい→ＮＰＯが情報発信
ＮＰＯと町会がつながるために、行政がつながる仕組みづくりをする
・親子向けの訓練をしているか？おんぶの講座もする
・行政の多世代でつながる取り組みを

防災アクションに子ども部会があるので、続きは防災アクションで！

松田：おんぶの講座をしている　ひろばから烏山中まで避難する
高校生にも日常から慣れておいてもらうような場を作る
宮崎：本日出た課題を防災塾で話す

ＳＮＳツールの活用→ＧＲＥＥというゲームコミュニティが一番有効だった

★今後のお知らせ
７月２１日（木）１８：３０－２１：３０　成城ホール４Ｆ
「切れ目のない支援」ネウボラの現状とか地域でどうしたらいいのか？

９月　　若者（調整中）

【まとめ】　宮崎氏

- 防災はイマジネーション：災害が起きた時を想像する。平時の困りごとのイマジネーションができるかが重要、

乳幼児連れの親子の困ることは何か考える

- 課題を相談できる人、団体などの引き出しを多くもつことが大事
- 自分でなんとかしようと思わずに、できる人の力を借りる